

六 花



2

俳句雑誌りっか

2013 (平成25年)

cover design Yuna Mizumo

落口の泡に包まれ寒の鯉
飛びながら寒さをしのぐのか鳥よ
紙漉や負はれたる子の足踊り
湯気立の湯気天井は天ならず
紙漉の窓に散弾銃の音
凍滝の割れて落ちくる目の当たり
白息に包まれて人すれちがふ
松明の草に伏せある鶉籠
左義長の余るほど縄持ち寄り
かまくらの灯に誘はれて決めし宿

宝船金箔ほどに薄くなし
枝先に冬芽毀ちし痕のあり
立春大吉日差しを返す捨鏡
白菜をめくりて一日暮れにけり
線香を束ねて焚かむ雪降り来
冬草の匂ひこうばし山羊の乳
門松を立てしわら屑掃きはじむ
海苔舟の旋回をして粗朶に着く
大寒の水笑ふほど紙を漉く
紙漉の手より日差しの逃げにけり

元日の日の入りゆける播磨灘
指先の暮れつつまるめ雪うさぎ
嘘つきしごとく雪雲去りにけり
底冷えや雨脚速き水を見て
冬雲の間より見ゆる月近し
雨あとの道を黄金に初日の出
雪晴やきつねの消えし石ぬれて
ゆりかもめ逆白波に遊びけり
寒鯉と自ら決めて動かざる

いつの間に冬耕の人消えてゐし 藤生不二男

いつのまにとうこうのひときえていし ふじもとふじお

高見へと紅葉の朱の散り昇る

初時雨北にたづねる句碑ひとつ

寒菊のきびしき色の匂ひけり

銀杏散る音一色の空のあり

先ほどまで確かに人が冬田を耕していた。しばらくして視点を戻すと、耕していたはずの人が消えている。はて、鋤を担いで帰っていった様子もないし、不思議なものだと首をかしげている。もしかしたら先ほどの耕し人は人間ではなかったのか、幻影を見たのかと怪しみ、急に不安と寒さが背中から襲って来たのである。春耕とちがって冬は人間の視界がせばまり冬耕の人が帰っていくところを見逃したのであるが「消えた」という表現が冬耕に適っている。物の急な欠落は不安を駆りたてる。その心理について効果的。

床の間の紅葉深山の匂ひあり

市川伊團次

とこのまのもみじみやまのおいあり いちかわいだんじ

一枚のいろは紅葉を栞とす

妻の手に紅葉ひとひらプレゼント

完璧が非となる庭の紅葉かな

紅葉散る五度目の風がパスワード

深山にあって深山の匂いはせず、手折ってきた紅葉を床の間に活けたことによつて初めて、深山の匂いを嗅いだのである。ものを離れることによつて離れたきたものを認識するということはあることで一つの真実をついている。表現方法として「匂ひかな」「匂けり」「匂ひせり」など様々できるが、それを通り越した発見の方が大きい。「あり」というのは市川伊團次の持ち味の表現方法で、善し悪しではなくつきつめれば好みの問題であろうか。今月の夢風撰作品は両作とも難しい漢字や言葉に頼らず。作つてもいい。

雪 卿 集

寒 鯉

佐津のぼる

寒晴や高さがへて鳶の輪
梟のこゑして杜の闇親し
連結器しかと噛みあふ初電車
凍蝶のふるへる翅を閉ぢ合はす
寒鯉の色集まりて動かざる

紅 葉

笹村 政子

盆栽の箸もて散らす紅葉かな
紅葉なす森のホールの音合せ
落柿の鳥の嘴傷みずみずし
照葉して背なの小暗き羅漢像
夕鴨の水尾を大きく岸に着く

せつ じゅ しゅう
雪 樹 集

睫 毛 田尻 勝子

片頬を冬日に焼かれをりにけり
小春日にプリズム宿る捷毛かな
からからと坂道上る枯紅葉
城垣に血しぶき蔦の紅葉して
外に出し時打たれけり鬼の豆

深 秋 筒井八重子

童らの紅葉つまめる可愛い手
深み行く秋を惜しめる人と人
山頂の殊に楽しき紅葉山
紅葉を訪ねて来たる有馬山
木の葉みなかすかに色をつけぬたる

蛍雪譚 六甲

一月号選後に

帰り花淋しき天の残される

貝森 光洋

帰り花とは返り咲きの花で狂い花、忘れ花などといひ十月頃季節外れの桜などが咲いて人々を感動させる。「返り咲き」の言葉は「いったん衰えたものが再び栄えること」をも指すが、花としては旬の季節に咲くのと違って、やや小ぶりでどこか寂しい感じのする花だ。掲句はその花の心象を空に投影して、天が取り残されたような寂寥感を覚えたのである。そのころの空は余りにも澄み切つて人なつつくくない。「おーい寂しいぞ！」と呼びかけても返答はなく、虚しく吸い込まれてしまう。そういう空だ。夢風撰。

お年玉子沢山とは知らず来て

我が家が子沢山とは知らずに年賀の挨拶に来た賀客。客の驚き戸惑つていている様子がユーモアを誘う。持つてきたお年玉の数が全然足りなく、焦っているのだ。ユーモアなどというものではなく恐怖の一瞬である。見方によっては川柳の皮肉りにもとれるが、川柳としてもかなりの名作である。

落葉踏む落葉とお喋りしたくなり

落葉とのおしゃべりはメルヘン。落葉を踏みながら歩いていると、いつの間にか落葉がしゃべっているように聞こえてきた。その時主人公は急に今まで孤独だったことに気がつく。そうだ落葉と話をしよう。そう思うと、落葉を踏みながら歩くのが楽しく、力が湧いてくるような気がする。その光景を第三者からは危ない人だと思つにちがいない。が、そんな世間的な見栄はもう必要ない。落葉とお喋りをしたいと思つたら楽しく気持ちまで温かくなってくる。お喋りの人は本当は孤独。

(以下略)

六花集

ひとしれず終咲ける七回忌
紅葉する枝寄せ付かず行者滝
泊ら藍や習ひたての九九またさらふ
あがき心に囚る夜長かな
立冬や強く押されし蔵書印
暮れてより風音だけのすすきかな
秋風や桜もみぢの散りはじめ
槇の山桜紅葉に日は入りぬ
閑かさや楓をみとる落葉掃き
かなしさを飾り立てたる紅葉かな

平居 濤子

菊谷 潔

江見 巖

眠る山裾ひるがへし風の舞ふ
義仲寺に本堂はなし初時雨
這ひあがり舞ひ上がりたる波の華
氷面鏡鳥の足音映らざる
すぐ消える氷柱のありし心電図